「終わりの先にある、はじまり」
ヨハネの黙示録 21 章 1－8 節

教会暦の最後の主日を迎え、来週からはアドベントが始まります。聖書の最初である創世記と、最後であるヨハネの黙示録を並べてみると、神さまがこの世界をどこへ導こうとしておられるのか、その大きな筋道が見えてきます。

創世記の初め、神さまが造られた世界は「極めて良かった」と祝福されたものでした。しかし、そこに「罪」が入り込み、人間は神さまとの関係も隣人との関係も壊してしまいました。まるで子どもが興味本位でおもちゃを分解し、自分では元に戻せなくなってしまったように、私たちは神さまとのつながりに「ひび」を入れ、自分の力では修復できない痛みを抱えています。

けれども、神さまは壊れた世界を見捨てて捨て去るのではなく、「新しい天と新しい地」を造り、「見よ、わたしは万物を新しくする」と約束してくださいます。私たちが天へ上っていくのではなく、聖なる都が「天から下って来る」とあるように、神さまの方から私たちのところへ近づき、共に住んでくださるのです。

この約束を実現するために、聖書の最初と最後をつなぐ真ん中に立っておられるのが、イエス・キリストです。主イエスは私たちの罪と痛みを引き受けて十字架にかかり、復活されました。ここに新しい創造がすでに始まっています。

では、今私たちが流している涙はどうなるのでしょうか。聖書は「いつか涙が自然になくなる」とは言わず、神さまご自身が「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる」と語ります。友ラザロの死に涙されたイエスさまは、遠くから命じるのではなく、泣いている人のそばにいてその悲しみを知り、ぬぐってくださるお方です。詩編 126 編に「涙と共に種を蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる」とあるように、今の涙の先には神さまの備えられた実りがあります。しかも、その完成は壊れたおもちゃを元通りに直すだけにとどまりません。まるで「空を飛ぶ車」に造り変えられるように、私たちの想像をはるかに超えた新しい完成へと導いてくださるのです。

この新しい命に、私たちはすでに招かれています。「渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませよう」とあるように、それは努力の報酬ではなく、弱さを抱えたままの私たちに注がれる恵みです。その恵みに生かされるとき、私たちの日常にも「ごめんなさい」や「ありがとう」といった小さな変化が生まれます。また、8 節には厳しい裁きや「おくびょうな者」という言葉も記されていますが、問われているのは恐れること自体ではなく、恐れの中で何により頼むかです。弱さを抱えながらも、何度でも十字架と復活の主に立ち返って歩むところに、信仰の勝利があります。

かつて私は読書感想文を書くとき、本の最初と最後だけを読んで間を飛ばしてしまいました。しかし神さまは、私たちの人生の物語を何一つ読み飛ばされません。私たちが流した涙も痛みもすべてご存じのうえで、新しい命の完成へと導いてくださいます。この希望を胸に、新しい教会の一年も共に歩んでまいりましょう。